



Title	Janet FrameとColin McCahon : ニュージーランド 1960年代の詩と絵画の邂逅
Author(s)	小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 49- 60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54335
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Janet Frame と Colin McCahon

——ニュージーランド 1960 年代の詩と絵画の邂逅——

小 杉 世

1. はじめに

スコットランド系三世のニュージーランド人作家ジャネット・フレイム (Janet Frame 1924-2004) は、8 年間の精神病院生活ののち、イギリスに渡り、精神病院あるいはロンドンを舞台にした主要な初期の作品群——『水のなかの顔 (*Faces in the Water*)』(1961)、『アルファベットの外縁 (*The Edge of the Alphabet*)』(1962)、『盲目の闇に香る庭 (*Scented Garden for the Blind*)』(1963)、『スノーマン、スノーマン (*Snowman Snowman*)』(1963) など——を執筆、本格的に作家としてのキャリアを歩み始めた。1963 年、ニュージーランドに帰国し、2004 年に白血病で亡くなるまで、多くの小説、詩を執筆した。ここ 10 年ほどの間に未発表の小説や短編その他の作品が死後出版され、フレイム研究が盛んになっている。現実を表す新しい言語表象のあり方の模索というモダニズム的テーマを引き継ぎながら、転覆的な力を「狂気」の表象に見出し、さまざまな周縁性をおびた存在の視点から、精神医学の言説や社会の抑圧的構造を批判するフレイムの作品は、自閉的空間を描きながらも、フレイムが生きた当時の社会の動きを反映している。Gina Mercer は、冷戦期にイギリスで書かれた『アルファベットの外縁』には「核兵器とそれがもたらす絶滅の脅威」(54) への言及が散在することを指摘している。そのすぐあとにイギリスで書かれた『盲目の闇に香る庭』や中編小説「スノーマン、スノーマン」にも、Marc Delrez などが指摘するように、やはり核や絶滅の脅威への言及がしばしば見られる。¹

本稿はフレイムがニュージーランドに帰国後、おもにダニーディン在住期間に書いた初期の詩を集めた『ポケット・ミラー (*The Pocket Mirror*)』(1967) を中心に、死後出版の詩集『グーズ・バス (*The Goose Bath*)』(2006) のなかの関連する詩にも一部言及しながら、ニュージーランドの画家コリン・マッカーン (Colin McCahon)² やマオリの詩人ホネ・トゥファレ (Hone Tuwhare) などの作品世界との関連のうちに、フレイムがどのような視点から冷戦期の世界を見つめていたかを論じる。

¹ Delrez (2002) 127 参照。

² 著作権上の問題から、本稿にはコリン・マッカーンの絵画の図版は付さないが、ここで言及する絵画はすべて次のサイトで閲覧できるので参照されたい。The Colin McCahon Online Catalogue (<http://www.mccahon.co.nz/>).

2. コリン・マッカーンの見た風景——「マヌーカの花が絶望の実をむすぶ」

フレ임が生涯で最も生産的に作品を執筆出版したのは、7年間のイギリス滞在のうち、1957年から1962年までロンドン南郊外キャンバーウェルに滞在していたところである。³ フレ임は『自伝』のなかで、ロンドンでの生活から多くのことを吸収したと回想している。1956年、イギリスに渡ったフレ임は、オールダマストーン行進、核軍縮キャンペーン (CND) による反核運動が力強く展開していく時期を目の当たりにして、スエズ危機、ハンガリー革命などの歴史的な局面に関心をもち、また西インド諸島の作家たちのことを知るようになる。⁴ ニュージーランドでも 1957 年ごろから核軍縮キャンペーンの支部設立へ向けての活動が開始され、1960 年代はじめになると、反核の署名や集会などが、まだ小規模ながら行われていた。⁵ キューバ危機によって冷戦世界における核戦争勃発の脅威が頂点に達し、フランスが核実験場をアルジェリアから南太平洋に移すことを公表した年でもある 1962 年には、ニュージーランドから何千マイルも離れたジョンソン島の上空で行われたアメリカの核実験の影響で電離層に異常が起り、ニュージーランド上空に核のオーロラが発生し、ハワイでは大規模な停電が起きた。のちにニュージーランドの非核立法制定に尽力した元首相デービット・ロンギは、法学部の学生であったその当時、オークランド郊外のオタフフで見た核のオーロラを黙示録が現実になったような光景として記憶しており、のちに非核運動に彼を向かわせた原風景として回想している。⁶ この核のオーロラは、ニュージーランドの核軍縮キャンペーンの機関紙 (1962 年 8 月号) でも、「7 月 9 日の夜、核実験がニュージーランドの上空を照らし」、「我々もまた核爆弾にいかに近いところで生活しているか」を感じさせたと報じている。この年には実に史上で年間最大回数の核実験が行われた (McEwan 2004: 95)。

当時の詩人や画家のなかには、それらの状況に対して敏感に反応する人たちがいた。ニュージーランドの画家コリン・マッカーンはその一人である。白人ながらマオリの土地に関する感覚にも深い共感を覚えたマッカーンは、1962 年の『門Ⅱ (Gate II あるいは *The Second Gate Series*)』をはじめとする『ゲート・シリーズ (Gate Series)』と呼ばれる一連の絵画で、核による環境の破壊を「西洋文明の闇の時代」⁷ として描いた。戦後の広島で原爆投下後の回収作業にあたったイギリス連邦占領軍のニュージーランド軍 (J-Force) の一員でもあったマオリの詩人ホネ・トゥファレが原爆投下直後の広島の記憶を原風景として核実験による自然の破壊の危惧を描いた詩を含む詩集『普通じゃない太陽』(1964)⁸ などと

³ King (2002) 117-121 参照。

⁴ Frame, *An Autobiography*, 417 参照。

⁵ オークランド大学図書館所蔵の核軍縮キャンペーンに関する 1957 年～1976 年までのマニユスクript資料、および Lange (1990) 15 参照。

⁶ Lange (1990) 10-13 参照。

⁷ 『門Ⅲ (Gate III)』(1970) に引用されているジョン・キャッセルバーグの詩行。

⁸ ホネ・トゥファレの詩「普通じゃない太陽」と、その出版 50 周年にあたる 2014 年 2 月、ギズボーンのギャラリーでマオリのアーティストたちによって行われた朗読パフォーマンスについては、拙論「オセアニアの舞台芸術にみる土着と近代、その超克——レミ・ポニファシオの作品

共に、ニュージーランドの芸術家や詩人による最も初期の反核の表明である。1980年代には『黒い虹』の連作を発表して、サモア人作家アルバート・ウェンツの同名の小説などにも影響を与えたマオリの画家ラルフ・ホーテレ (Ralph Hotere)、仏領ポリネシアのモルロア環礁での核実験が海底世界にもたらした汚染と被害をクジラの視点から批判したウィティ・イヒマエラ (Witi Ihimaera) の『クジラの島の少女 (The Whale Rider)』(1987)⁹ などが続く。ホーテレは1984年に、トゥファレの詩「普通じゃない太陽」をテーマとした絵画を描いている。大地の上の空間のほとんどを占める巨大な黒い太陽（あるいは皆既日食）、その残された上下の黒い^{マージン}周辺にトゥファレの詩行を書きこんだこの絵画は、核の支配の脅威をクローズアップしている。¹⁰ さらに1990年代以降には、タヒチ人作家シャンタル・T・スピッツ (Chantal T. Spitz) が、核ミサイル基地で働くフランス人女性と基地建設で故郷の村を失ったマオヒ青年との恋愛を描く小説『夢を砕かれた島 (L'Île des Rêves Écrasé)』(1991) (2007年に英訳版 *Island of Shattered Dreams*)、マーシャル諸島クワジェリン島育ちのハワイ在住アメリカ人作家ロバート・バークレー (Robert Barclay) が1980年代のイバイ島を舞台に描く小説『メラール (Me[al])』(2002) などのオセアニアの核文学や、きわめて抽象的なダンス芸術で南太平洋における核実験や環境の問題を繰り返し問い続けているニュージーランド在住サモア人舞台芸術家レミ・ポニファシオ (Lemi Ponifasio) などの舞台芸術作品へとその系譜は続いていく。¹¹

マッカーンは、晩年いよいよ悲観的になり、家族も含めて周りの人々との接触を断ち、アルコール中毒による思考停止に近い精神崩壊状態のなかで、造形的な絵画を描くことはやめ、ひたすら黒く塗りつぶしたキャンパスに白文字で信仰の懐疑を綴った作品を残して、1987年に世を去った。マッカーンが絶望のうちに亡くなった1987年は、先に触れた核のオーロラを原風景として反核運動を展開していったニュージーランド首相デイビット・ロンギが非核立法をニュージーランドに導入することに成功した年であることを思えば皮肉である。1987年は、オークランドで起きたフランスの諜報員によるレインボー・ウォリア号爆破事件などに対する世界の批判が高まり、非核南太平洋へ向けた動きが実現していく年でもある。

これらの社会の動きは、フレイムの作品世界にも間接的に反映されている。ブルームズベリのアーティストたちのようなモダニズム絵画（キュビズムの影響を受けた人物画など）から出発したマッカーンは、アメリカ訪問から帰国後、オークランド郊外ティティランギに在住し、1950年代終わりから、北島の風景を描くなかで環境の汚染の問題に関心をよせている。『ノースランド・パネルズ (Northland Panels)』(1958) と題する8枚のパネルから

世界と越境的想像力をめぐって」(2015) 参照。オセアニアの舞台芸術や詩に見られる核の表象との関連において論じている。

⁹ 小杉 (2013) 参照。

¹⁰ O'Brien (1997) 88-90 参照。ホーテレの絵画とマッカーン、トゥファレとの関係を論じている。

¹¹ Huggan & Tiffin (2010)、DeLoughrey (2011) 235-253、小杉 (2013) に関連した議論がある。

なる風景画には、「雨」と題するパネルに描かれた黒い木（あるいは黒い雨雲にも見える）、トゥイ（Tui）の鳴き声を表象する文字の上に描かれた一面の黒い空、最後のパネルに引用された「ここは暗くマヌーカの花が絶望の実をむすぶ」という詩行が、北島の風景に暗い影を投げかけている。また、マッカーンが 1959 年に描いた『エリア三部作 (Alias Triptych)』の中央パネルには、地下の石棺からキリストの復活の生命力を示唆する¹² 円柱状の赤い柱が黒い大地を突き抜け地上へと伸び、そこから空へ広がる茜色の雲になっている。無人の大地に茜色の雲がたちのぼる（ように見える）この絵を見て、そこに核実験のキノコ雲やこの世の終わりの光景を連想するのは筆者だけではないだろう。

マッカーンは 1961 年に核軍縮キャンペーンに参加し、公的にその活動への支持を表明した。1962 年 9 月にクライストチャーチで開催された『ゲート・シリーズ』の展覧会に際しては、CND の秘書から謝意を表すメッセージを受け取っている。¹³ マッカーンは『ゲート・シリーズ』の創作過程において、抽象画によるメッセージ伝達の困難や限界を感じ、友人ジョン・キャッセルバーグの詩行を併せ用いることにより、ラルフ・ホーテレなどがのちに展開した現代絵画の先駆けとなる作品を発表した。神がバビロンを滅ぼすエレミア書のくだりをもじったキャッセルバーグの詩の「おお地球よ、全世界の槌がいかに折られ壊れたのか (O Earth, Earth, Earth. How is the hammer of the whole earth cut asunder and broken)」という詩行のパネルから始まる『門Ⅱ』は、「死と契約を交わした地球の住人たちが天変地異と「焼き尽くす炎」のなかで「友人の肉を喰らい」、「血で穢れ、皮膚が骨にへばりついた盲人たちが街をさまよい」、「大地が酔っ払いのようによろめき、月は困惑し、太陽は恥じて（顔を隠すだろう）」という黙示録的な光景を提示している。この詩行の凄まじさはとても絵画で視覚的には表せない。マッカーンは、詩を掲げたパネルの合間に、微妙に赤のまじった黒のパネル、三角形の小さな空を残した一面黒の大地、暗褐色の竜巻か雲がうっすらと立ち上る闇、門をあらわす四角形などの抽象的なイメージのパネルを挿入し、鑑賞者に詩の言葉のもつ意味を想像させる。一方、1970 年の『門Ⅲ』では、抽象画ではなく、北島の風景を背景に神の声を表す「I AM」の文字をおいて、やはりキャッセルバーグの詩を引用し、核による世界の破壊を批判している。

フレイムもまたこのような 1960 年代の社会の動きに敏感に反応していた。フレイムとマッカーンはほぼ同世代（マッカーンが 5 歳ほど年上）であり、二人とも南島の海岸沿いの町出身であるという共通性をもつ。画家マッカーンと詩人フレイムが目の前の日常の風景に核の脅威や環境の汚染、戦争の影など、心象風景を重ねるまなざしには通底するものがある。この二人の想像力がどのように交差するかを見てみよう。

3. フレイムの詩集『ポケット・ミラー』——南太平洋から見た核の世界

イギリスから帰国したフレイムは、1964 年 1 月、ジョン・マニーの紹介で当時オークラ

¹² Brown (1993) 120 参照。

¹³ Brown (1993) 121-122 参照。

ンド市立美術館の館長だったマッカーンに会っている (King 2000: 266)。マッカーンがフレームにとって想像力の波長の合う画家であったことは、「マッカーンの絵画 (A Painting by Colin McCahon)」¹⁴ と題したフレームの詩を読めばよくわかる。この詩でフレームが言及しているのは、マッカーンの 1965 年の絵画『XP』である。黒と灰色の大地に埋もれた巨大な骨か十字架のように見える装飾文字。この絵画は、アボリジニの作家・画家であるサリー・モーガンがオーストラリア建国二百年に描いた『もう一つの物語(Another Story)』(1988) という絵画の明るい農場の風景の地下にひしめく無数のアボリジニの死骸を思い出させる。しかし、マッカーンの風景では、空はキャンバスの端っこの小さな三角形の空間に過ぎず、地上の風景はなく、土地は死に絶えているように見える。フレームの詩はマッカーンの絵画から想像した光景を語っている。「荒れ果て、黴の生えた土地」のなかに埋まった「骨のようにきれいに白く」輝く大きな「X」と「P」の文字、そのイメージが「プロペラ型の骨」と呼ばれ、さらにその文字からフレームは「駆除(X-Pel)」、「爆発(X-Plode)」、「消滅(X-Pire)」などの言葉を連想し、核実験やベトナム戦争、その他の人間の活動による(環境や世界の)破壊を想像させる。「ハンマーと釘」で丈夫につくったはずの家にも隙間風や雨がしみこむように、肉体を支え歩行その他の人間の様々な行動を可能にしている私たちの「骨」にも雨がしみこみ痛みをもたらす、とフレームが語るとき、それは一体どんな「雨」なのかと読者は自らに問うだろう。ストロンチウム?カドミウム?それともエイジェント・オレンジに汚染された雨だろうか。「疫病の花は(大地の)なかでめざめ開花し、ハンマーと釘でつくった安全なはずの家の窓をのぞきこみ、(毒の)蜜をさしだす」という最後の詩行は、同じく『ポケット・ミラー』におさめられた次の詩「アトム (Atom)」を連想させる。

今や花は蜜を吸いとられ
鉄の巣で策略をめぐらす蜂たちは
統御し 混乱し 脅迫する
閃光と火によって生命を奪う力をもった
手つかずの甘い蜜

それは目に見えない花
幼虫に誕生をもたらす不死の甘露
大気を求めて生まれる概念
鉄の蜂たちよ、新たな糧のためか
死を求めてなのか?
その甘い蜜を散くのは (34)

花、蜜、蜂といった牧歌的なイメージで、静かに蓄えられ破壊をもたらす原子力の脅威を

¹⁴ Frame, *The Pocket Mirror*, 105-106.

描くのは、南太平洋的想像力といえるだろう。おそらく「アトム」というタイトルがついていなければ、これが核の脅威を描いた詩であるとはわからないだろう。同じく『ポケット・ミラー』のなかの次の詩「雪 (Snow)」も、なんでもない冬の光景に、それ以上のものを見ている。¹⁵

繰り返される、大いなる罪は
欺瞞と偽装（隠ぺい）に満ち
ほとんど自然のなりゆきのように
傷ついた世界が永遠に横たわる
石膏にとじこめられて
思い出す人も幾人かはいる 緑が
その下にあったこと
決して忘れない人々がいる
砕かれた骨のことを (43)

この詩の最後の行の「砕かれた骨のことを」は意識であり、原文では「骨折 (fracture)」という語が用いられている。つまり、雪に閉ざされた大地を骨折して石膏のギブスをはめた人体のイメージと重ねているのである。

筆者がこの詩から連想した光景が二つある。ひとつは、マーシャル諸島のエニウェトク環礁に 1980 年に完成した巨大なコンクリート製の「カクタス・ドーム」といわれる核実験の廃棄物処理場である。¹⁶ 核実験でできたクレータを核廃棄物で埋め、巨大なコンクリート製の蓋をかぶせたこのドームは、今も放射性物質がその下に眠る大地の癒えない傷の象徴である。短編『『三千軍兵』の墓』で小田実はこのドームの存在にふれ、そこにかつてマーシャル諸島で玉砕した日本帝国海軍の六千人の「三千軍兵」、基地建設の労務者としてアジア各地から連れて来られたアジアの民間の「三千軍兵」、戦争の巻き添えで死んだクエジェリン島の住民の「三千軍兵」、核ミサイルの「三千軍兵」、度重なる核実験の結果としての「死の灰」の「三千軍兵」の墓を重ねてみており、それらの記憶の亡霊がコンクリートの厚い蓋をもちあげて立ち上がることはないのだろうかと思像している。もうひとつの光景は、震災 4 年を迎えようとする春先の福島を訪れたときの帰宅困難地域のまだ除染のすすんでいない雪に覆われた土地である。津波で倒壊した建物や大きな瓦礫はもはや除去され一面の空き地になっている。「雪が積もると線量が下がる、雪がとけたらとたんに上がる。こうして一面雪に覆われているときれいにのどかなところに見えるけどね・・・」と土地の人が言う。津波の傷跡は雪に覆われ一時的に見えなくなっていて、ところどころに壊れ

¹⁵ 「雪」と題するもうひとつの詩が、死後出版の詩集『グーズ・バス』(2006)にある。その詩の描く心象風景も、やはり死のイメージと結びつき、単なる風景以上のものを意味しているように思われる。

¹⁶ Firth (1987) 参照。

た農耕具の断片がまだ置き去りにされているのが見える。雪で覆われた土の下には放射性物質と共に津波で命を失った魚や動物やひょっとすると探し出されなかった人の遺骨もまだ埋まっているかもしれない。もちろんこれらの連想は「誤読」である。というのは、フレイムがこれを書いたときには、まだ「カクタス・ドーム」はできていなかったし、福島原発の事故（どこるかチェルノブイリ原発事故）も起きてはいなかった。しかし、予言者の言葉やヴィジョンがそうであるように、詩はときに未来をも映してしまう。戦争や核実験や搾取によって、原発や化学工場の事故によって、また鉱山開発によって、傷ついた土地は世界のあらゆるところに存在する。

「雪」の数編後におさめられている「人々が病み、死につつある(People Are Ill, Dying)」¹⁷という詩が描くのは、広島・長崎の原爆か、ベトナム戦争のナパーム弾で焼かれた人々のイメージなのだろうか。フレイムの想像力によると、平和な家庭のキッチンの朝食調理用のフライパンは、戦場の地獄に様変わりする。この詩では、フライパンで調理される朝食用のキノコと「爆弾の炸裂によって」「キノコのように肉から皮が剥けた」人びとの姿が重ねられ、一切の感傷なしに、「人間は単に、爆弾の炸裂によって焼かれ、死の虚無に食われる食用キノコになのか？」と問いかけている。

『ポケット・ミラー』には、ナパーム弾に関する詩が二つある。「ナパーム」というタイトルのその頭文字をとった一行一語の文字遊びからなる八行詩(nay / son / say / psalm // pay / palm / sun / day)¹⁸は、「ナパーム(napalm)」という武器に対して、神の子(son)によってもたらされた「詩編あるいは賛美(psalm)」を対峙させ、キリストが受難前にエルサレム入りしたのを群衆が平和と勝利の象徴である「棕櫚(palm)」の葉をふって歓迎したという「棕櫚の日曜日(Palm Sunday)」をかけあわせて、キリストの受難を連想させる反戦詩になっている。もうひとつの詩「ナパーム弾での爆撃について(Instructions for Bombing with Napalm)」¹⁹は、肌の「健康」を保つ「ローション」として、また日常の食糧として人々に親しまれている「ココナッツオイル」が「地獄」の火で人を焼き尽くす「殺人計画(a neat lethal plan)」の装置になることの皮肉を描いている。

ナフサ（ガソリンの一種）にヤシ油からとれるある成分を加えてジェル状に粘着性をもたせた初期のナパーム弾は、第二次世界大戦中、日本への空襲にも使用され、終戦前数か月のナパーム弾による都市への集中的空襲は、広島・長崎の原爆による死者よりも多くの犠牲者を生んだという。²⁰その後、ナパーム弾はポリスチレンとベンゼン、ガソリンを材料に生産されるようになり、ベトナム戦争、湾岸戦争でも用いられた。安価なうえに現地で容易に製造できるナパーム弾は、枯葉作戦のエージェント・オレンジと並んで、ベトナム戦争で大量に用いられた非人道的な兵器のひとつである。高温で燃焼し、燃焼時間が長

¹⁷ Frame, *The Pocket Mirror*, 45-46.

¹⁸ Frame, *The Pocket Mirror*, 27.

¹⁹ Frame, *The Pocket Mirror*, 18-19.

²⁰ オークランド大学図書館所蔵の核軍縮キャンペーンに関する 1957 年～1976 年までのマニュアル資料参照。ナパーム弾に関する記事が複数ある。

く、対象物に粘着すると水で消火できないナパーム弾は、広範囲にわたる一酸化炭素中毒と高温による負傷を引き起こし、きわめて致死率が高い。ココナッツオイル（ヤシ油）という南太平洋ではとくに親しみの深い健康的で無害な日常の食糧が、人や森林や民家を焼き尽くす非人道的な兵器に変貌することの皮肉と恐怖と驚愕は、フレイムの想像力に強く訴えかけたにちがいない。

フレイムの死後出版の詩集『グーズ・バス』（2006）の編者デニス・ハロルドによれば、『ポケット・ミラー』におさめられた詩のほとんどは 1964 年から 1966 年の間にダニーデインで書かれたという。²¹ 『ポケット・ミラー』の「クリスマスと死（Christmas and Death）」と題する詩は、フレイムが 1956 年スペインのイビサ島に滞在中、そこでのクリスマスの情景に発想を得て書いた詩²² であるが、そこにもやはり現実の情景を超えた連想がはたらく。裏庭で食用になるのを待つ七面鳥の叫び声（ブラボー）は、その 2 年前にマーシャル諸島で行われた核実験（キャッスル作戦のブラボー実験）を連想させる。さらにこの詩集が出版された 1967 年当時には、ニュージーランド人の読者の連想は、クリスマス島で行われた核実験に対する抗議の記憶²³ にも及んだであろう。

クリスマスと死は餓えの時
愚か者と死にゆく者のみが
この世の囲われた視界のなかで
絶対的な賛美を唱える
不可視のものにブラボー、ブラボーと叫んで

太陽のない小さな裏庭で七面鳥が
あるいは縮みゆく世界の白い皿に横たわる病人が
何に対して暴力的な賛美を唱えるのか
誰にわかるだろう （88）

不可視のもの（the Invisible）は、絶対者「神」とすると同時に、核兵器のもつ絶対的な力を示唆し、クリスマスの生贄の七面鳥と核実験によって破壊されつつある世界でその犠牲となる人間が重ね合わされ、日常の言語を用いながら、核を崇める冷戦社会の狂気を痛烈に批判している。

1970 年代以降のニュージーランドでは、反核運動が草の根で大きく展開し、国全体の非

²¹ Frame, *The Goose Bath*, 218.

²² Frame, *An Autobiography*, 338.

²³ 1962 年 4 月 1 日、オークランド市庁舎コンサートホールで 600 人の市民がクリスマス島での核実験に反対する抗議集会に集っている。オークランド大学図書館所蔵の核軍縮キャンペーンに関する 1957 年～1976 年までのマニフスクリプト資料参照。

核政策の基盤を支えていったが、²⁴ 自然や日常の風景に反核・反戦思想を読み込んだフレイムのこれらの初期の詩も、それに比するささやかながらインパクトの強い抵抗の詩である。

さらにもう一つ例を挙げれば、『グーズ・バス』におさめられた「伝説 (The Legend)」²⁵ という詩（フレイムが 1969 年、米国ニューハンプシャーのマックドウェル・コロニー滞在中につくった詩である）も、環境に対するメッセージという点で、画家マッカーンが北島の風景を見つめるまなざしに近く興味深い。フレイムは、ニューハンプシャーの秋の紅葉の森林の光景に、この地方に古くからある花崗岩鉱山の採石作業が森の生態系にもたらす影響を読みこんでいる。次の 4 行の詩行からそのことを察することができる。

（地下深い花崗岩壁の牢獄に横たわり
四面体の水晶のメッセージが時を刻む音のように鳴るのを聞く）
私ならルビーや金塊などの宝には近づかない
扱うには危険すぎるものを欲しくはないから （109）

鉱物の眠る地下深い世界を想像し、「扱うには危険すぎる (too hot to handle)」ものに手をふれたくないというフレイムの詩にみられるメッセージは、オーストラリアのウラン鉱山開発に反対するアボリジニの人々のメッセージにも通底する感覚である。²⁶ しかし、フレイムの場合は、アボリジニの人々がドリーミングの世界観にもとづいて、そのメッセージを表明するのに対して、そのような「土着性」を感じさせない表現で淡々と述べている。

「壊れた黄色い皿」のような太陽の「尿の色の光」がさしこむ森林、「山と溪谷にしたたる血の無数のスナップ写真」²⁷のネガ」である紅葉といったメタファーや「森林に潜む軍隊」、「上空を飛ぶ飛行機」、「動物たちが逃げ去ったか死んだ」らしい静かな森、「生き残り」のカラスたちの「しつこく苛む叫び声(persecuting cry)」、「汚染された空気」を吸おうとする木の「受難」と「忍耐」といった表現から、その光景が単なる日常の森林の風景でなく、何らかの異変の影がそこに重ね合わせられていること、森林とその生態系が過去の「伝説」になってしまうことの危機を描いていることがわかる。なかでもフレイムが、動物たちが逃げ去って静まり返った森のなかで、動くことのできない木が、そこにじっととどまり、花崗岩採石場から大量にでる SPM（浮遊粒子状物質）によって「汚染された空気」を必死

²⁴ Leadbeater (2013) 参照。

²⁵ Frame, *The Goose Bath*, 107-109.

²⁶ Ishtar (1994) 147 参照。南オーストラリアの先住民コカタ (Kokatha) の女性ジョーン・ウィングフィールド (Joan Wingfield) は、ウラン鉱山について、「地中に眠るトカゲのおなか (the stomach of the sleepy lizard)」を切り開き、「鉱山の支柱 (the main shaft of the mine's)」をそのおなかのど真ん中に突き立てるのは危険なことだと述べている。2015 年に Giramondo Publishing から出版予定の拙論 'Survival, Environment and Creativity in a Global Age: Alexis Wright's *Carpentaria*' で触れている。

²⁷ 原文は 'Killing snapshots' で「(狙わずに撃つ狩猟の) 速射」の意味もかけ合わせられている。

に呼吸して生き続けようとするその「受難」に注目し、「氷」以外に比するものがないその愚かなまでの「忍耐力」を描いているのは興味深い。フレ임が描く木の「受難」は、先に言及したマオリの詩人ホネ・トゥファレの「普通じゃない太陽」の光景と重なる。トゥファレはこの詩で核の太陽の放射線の影響で生命力を失い、死にゆく運命にある木の最期を予言して、「影のない山々／白い野原／活気のない海底」(23) という生命の死に絶えた終末論的世界のヴィジョンを描いている。トゥファレの 2 年後に生まれたフレ임は、ほぼ同世代の（少し先輩の）このマオリの詩人と同じように、木という人間ではない自然の生命に焦点をあてて、人間の活動がもたらす環境破壊に対して警鐘を発している。²⁸

4. おわりに

フレ임は子供のころから、詩人になりたいという夢をもっており、多くの詩を書いてもいるが、批評家にあまり評価されることはなく、おもに小説家として知られている。その原因はフレ임の用いるメタファーや比喩がときに非常にわかりにくいものであり、かなり想像力をはたらかせ、注意深く読まなくては、何について述べているのか理解できない詩も少なくないことだろう。ここで日本語に訳した詩も、筆者の想像力による解釈がかなり入っていることは否めない。フレ임の本領がよりよく発揮されているのは、イギリス滞在時に書いた初期の小説群のような作品であることは確かではあるが、フレ임の詩を読むことによって、自閉的な想像空間を描くと見られがちなフレ임が、鋭敏な知性と感覚でもって彼女の生きた時代の世界の動きをとらえ、静かながらも鋭い社会批判のメッセージを発していたことがわかる。1960 年代に書かれたフレ임の詩に見られる核への言及は、イギリスで目のあたりにした核軍縮キャンペーンの活動の展開に影響を受け、さらに 1963 年に帰国後、まもなく、ニュージーランドにおいて、核による世界の破壊に対する危惧を絵画で表していたコリン・マッカーンなどの作品に触れることによって、初期の詩集『ポケット・ミラー』におさめられた詩に結実したものと思われる。マッカーンがマオリ語の詩やコルー（シダの芽をかたどったデザインでマラエの装飾などに用いられる）のパターンを用いたりして、マオリの土地観や宇宙観に対して共感を示していたのに対し、フレ임の作品ではそのような「土着化」²⁹ がきわだって行われることはなかったが、木などの人間以外の生命体をみつめるまなざしには、マオリの詩人ホネ・トゥファレにも通じるものがある。モダニズム世界とポストコロニアル世界をつなぐフレ임のこれらの詩に反映される冷戦時代の意識を、さらにフレ임の代表作である小説と同時代の冷戦小説

²⁸ フレ임が滞在したマックドウェル・コロニーから一時間ほどのところには、後にニューハンプシャーの三分の一の電力を供給することになるヴァーモント・ヤンキー原子力発電所（近年老朽化でしばしば問題を起こしてきた）が、フレ임の滞在当時、建設開始中だったことは興味深い。

²⁹ Terry Goldie (1989) 13 参照。白人作家がしばしば先住民を描くことによって土着性をとり込もうとした現象を「土着化 (indigenization)」と呼んでいる。

との関連において、また別の機会に論じることにする。³⁰

*本稿は、平成 26-29 年度科学研究補助金（課題番号：26370316、研究代表者：山田雄三「環境汚染問題への英語圏モダニズムの文化的介入法を分析する」）の助成を受けている。

参考文献

- Brown, Gordon H. *Colin McCahon: Artist*. New Edition. Auckland: Reed Books, 1993. (1st 1984.) Print.
- ‘Christmas Island tests find irony, says bishop’. *The Auckland Star*. April 3, 1962. Print.
- Colin McCahon: I AM*. TVNZ. 2004. DVD.
- Cronin, Jan, and Simone Drichel eds. *Frameworks: Contemporary Criticism on Janet Frame*. Amsterdam: Rodopi, 2009. Print.
- Cross, Roger. *Fallout: Hedley Marston and the British Bomb Tests in Australia*. Kent Town: Wakefield Press, 2011. (1st 2001.) Print.
- DeLoughrey, Elizabeth. ‘Heliotropes: Solar Ecologies and Pacific Radiations’ in *Postcolonial Ecologies: Literatures of the Environment*. Oxford: Oxford UP, 2011. Print.
- Delrez, Marc. *Manifold Utopia: The Novels of Janet Frame*. Amsterdam: Rodopi, 2002. Print.
- Firth, Stewart. *Nuclear Playground*. Sydney: Allen & Unwin, 1987. Print.
- Frame, Janet. *An Autobiography*. New York: George Braziller, 1991. Print.
- . *The Edge of the Alphabet*. New York: George Braziller, 1995. (1st 1962.) Print.
- . *Faces in the Water*. New York: George Braziller, 1994. (1st 1961.) Print.
- . *The Goose Bath: Poems*. Auckland: Vintage, 2006. Print.
- . *The Pocket Mirror*. New York: George Braziller, 1991. (1st 1967.) Print.
- . *Scented Gardens for the Blind*. New York: George Braziller, 1980. (1st 1963.) Print.
- . *Snowman Snowman: Fables and Fantasies*. New York: George Braziller, 1993. (1st 1963.) Print.
- Goldie, Terry. *Fear and Temptation: The Image of the Indigene in Canadian, Australian and New Zealand Literatures*. Kingston: McGill-Queen’s University Press, 1989. Print.
- Huggan, Graham & Helen Tiffin. *Postcolonial Ecocriticism: Literature, Animals, Environment*. Abingdon: Routledge, 2010. Print.
- Ishtar, Zohl dé. *Daughters of the Pacific*. Melbourne: Spinifex Press, 1994.
- King, Michael. *An Inward Sun: The World of Janet Frame*. Auckland: Penguin, 2002. Print.

³⁰ 「ジャネット・フレイム——アルファベットの外縁から見た世界」というタイトルで、共著の研究書（仮題『オーストラリア・ニュージーランド文学論文集』）の第7章として、彩流社から出版の予定である。別章では、サワダ・ハンナ・ジョイ氏が、この論文でも言及している詩人ホネ・トゥフアレについて、やはり「広島を見た詩人」という観点から論じる予定である。

- . *Wrestling with the Angel: A Life of Janet Frame*. Washington D.C.: Counterpoint, 2000. Print.
- Lange, David. *Nuclear Free: The New Zealand Way*. Penguin, 1990. Print. [デービット・ロンギ『非核——ニュージーランドの選択』国際非核問題研究会訳. 平和文化, 1992.]
- Leadbeater, Maire. *Peace, Power & Politics: How New Zealand Became Nuclear Free*. Dunedin: Otago University Press, 2013. Print.
- McEwan, Andrew. *Nuclear New Zealand: Sorting Fact from Fiction*. Christchurch: Hazard Press, 2004. Print.
- Mercer, Gina. *Janet Frame: Subversive Fictions*. St Lucia: University of Queensland Press, 1994. Print.
- ‘Nuclear Tests Light Up New Zealand.’ *N.Z. Campaign for Nuclear Disarmament Bulletin* No.2 (August 1962): 1. Print.
- O’Brien, Gregory. *Hotere: Out the Black Window: Ralph Hotere’s Work with New Zealand Poets*. Auckland: Godwit Publishing, 1997.
- Reihi, Peter and Victor W. Sidel. ‘Napalm’ in *Campaign for Nuclear Disarmament (NZ) Records: 1957-1976*. (Manuscripts held in the University of Auckland Library.)
- ‘600 Call For Ban on Bomb Test’. *The Auckland Star*. April 3, 1962.
- The Art of Sally Morgan*. with an introduction by Jill Milroy. Ringwood: Viking, 1996.
- ‘The Facts about Napalm’ in *Campaign for Nuclear Disarmament (NZ) Records: 1957-1976*. (Manuscripts held in the University of Auckland Library.)
- Tuwhare, Hone. *No Ordinary Sun*. Auckland: Blackwood & Janet Paul, 1964. Print.
- UNSCEAR 2000: Sources of Ionizing Radiation*. (Abstract from *UNSCEAR 2000 Report* vol.1.) Web. http://www.laradioactivite.com/fr/site/pages/RadioPDF/unscear_artificielle.pdf
- 小田実『『三千軍兵』の墓』『コレクション 戦争と文学 第19巻 閃：ヒロシマ・ナガサキ』集英社, 2011. 728-746.
- 小杉世「この世の最期のダンス? ——Lemi Ponifasio の *Birds with Skymirrors* と太平洋の核文学」『ポストコロニアル・フォーメーションズⅧ』大阪大学大学院言語文化研究科, 2013. 23-36.
- . 「オセアニアの舞台芸術にみる土着と近代、その超克——レミ・ポニファシオの作品世界と越境的想像力をめぐって」『土着と近代—グローバルの大洋を行く英語圏文学』木村茂雄ほか編. 鶴見書房, 2015 (9月発行予定). 245-284.